

# 平成三十年二月の收穫

土屋 博

一「中等教育 國文軌範 全」落合直文著

(博文館藏版、明治廿五年刊、正價金五拾錢、三三〇頁)

古書價格五百圓也。論文(北畠親房「足利高氏兄弟の抽賞につき大にそのいはれなきことを論ず」)、序跋文(林子平、藤田東湖、加茂眞淵など)、記文(本居宣長など)、紀行文(紀貫之など)、歴史文(増鏡など)、記事文、戦記文、隨筆文(枕草子のみ五篇)、物語文(源氏物語のみ三篇)、書簡文(村田春海など)、雜體文(貝原益軒など)。「國文を一定せざるべからずとは學者社會の輿論なり」、「古き近き諸體の文を集めて以て教科書にあてざるべからず」と立場なり。

二「伊藤公演說全集」

(博文館、明治四十三年刊、定價金壹圓貳拾錢、八六八頁)

古書價格八百圓也。序に伯爵大隈重信曰く、「公は頭腦の明晰に加ふるに雄辯にして、かつて二人の憲法學者が負かされたりと云ふ逸話もある程なり。予は二歳の年長者なるの故を以て、屢々公を擊退したるも、なかなか困難を覺えたり。公はまことに予にとりて好敵手なりき。」と。目次は、總理大臣としての演說、政友會總裁としての演說、統監竝韓太子太師としての演說(若き韓太子日本國內旅行の様子も含む)、私人としての演說より成る。

三「維新志士遺芳帖」

(國民新聞社藏版、同文館發行、明治四十三年刊)

古書價格二千八百圓也。和綴。縦三七糎、横二六糎、厚さ三糎の豪華本。志士の遺墨の寫眞集なり。曩なまに上野公園にて開催せられたる「維新志士遺墨展覽會」の感化を永久に持続し普及せんが為に出で來れり。冒頭に在るは、山内容堂筆の「高風徐度拂雲煙」。續いて武市半平太自畫讚肖像、坂本龍馬・中岡慎太郎・久坂義助書東、佐久間象山筆の「櫻賦」など。當時の印刷技術の粹を結集したる美しき仕上がりなり。

四「維新志士正氣集」國民新聞社編輯

(民友社、明治四十四年刊、特價金五圓、三八五頁)

古書價格二千五百圓也。縦三十一糎、横二十二糎、厚さ四糎の豪華本。遺墨中心の姉妹書「維新志士遺芳帖」に比し遺文を主とし、手簡日記詩文歌俳の類を含む。寛政諸家(高山彥九郎等)、賴氏一門、崋山・長英、公卿より、松陰、木戸、西郷、大久保らを含む。

五「賴山陽先生眞蹟百選」

(審美書院、昭和六年刊)

古書價格五千圓也。縦四十糎、横二十六糎、幅四糎の豪華本。蘇峰の序によれば、本書の特色は、材料の正確にして疑はしき品物を交へざることに、採集の多方面に亙り局部に偏在せざること、年代順排列

により山陽その人の歴史を暗示すること、各方面より「雲耶山耶」の幅を蒐集したることなりとぞ。

六「昭和十六年度印刷 今古文粹 陸軍幼年學校用 全」(本文三六八頁、附録九八頁)

古書價格三百圓也。冒頭には「本書を以て作文の學習に資すべし」との阿南惟幾東京陸軍幼年學校長(昭和十一年當時)の通達文書掲げらる。大正三年陸軍教授柿村重松、教授囑託神田松吉編纂のものを昭和十一年に改訂せる由なり。

目次をみるに、第一篇は記述文。觀兵式、遊就館、櫻に始まり、大和田建樹「千里の春」(春晴千里、山また山)、徳富蘇峰「四季」(春宵一刻千金の價ありと謂はんより寧ろ春日一刻千金の價ありとこそ謂ふべけれ)と續く。

第二篇は論説文。高山林次郎「皇室に對する本務」、藤岡作太郎「自然と我が國民性」、大町桂月「清淨國」など。

第三篇は儀禮文。乃木希典「第三軍司令官復命書」、山川健次郎「乃木大將への感謝狀」など。第四篇は書牘文。乃木希典「旅順陥落の際の新年賀狀」(新年の御慶目出度申納候。然れば久々御無音に打過候處、實は彈丸と人命と時日との多數を消費しつゝ未だ埒明き不申候爲め唯々苦悶慙愧の外無之候。漸く須將軍も根氣負けの氣味にて開城致し呉れ、當方面の一段落を得候。無智無策の腕力戦は、上に對し下に對し、今更ながら恐縮千萬に候。尙ほ愚息戦死の際は特にご懇情を賜はり候由、多謝の至に御座候。御禮申上候。先は久々御無音の謝罪旁、例の冗言迄不惡御一讀奉願候。恐々頓首。明治三十八年一月四日 希典拜 寺内賢兄閣下)ほか。

附録として「文語一斑」を収録す。第一「作文の要訣」、文を作るは難きことなく、多讀、多作、多思の「三多」を奨勵す。第二「文章の種類」。第三「正しき文章」。第四「文章各種の練磨」、改作、正誤、聽寫、謄寫、短縮、結合分解、填補、敷衍、翻譯。第五「修辭法概説」。

元は片假名交り文なれば、稍讀みづらき面もあれど、文語學習の基礎的材料とはなり得べし。

(平成三十年六月七日受附)